

第3章 まとめ

今年度の調査研究は、昨年度の調査研究から明らかになった、学習機会の提供が少ない思春期に焦点を当てることからスタートした。高等学校や特別支援学校において、親学習プログラムを活用した家庭教育支援を効果的に展開するため、その参考となる活用例などを集めた資料を作成し、積極的な活用を促していくことで、県内の家庭教育に関する学習機会の充実を図ることをねらいとした。

この第3章では、そのねらいのもと進めてきた研究の実践等から得られた成果や課題をまとめるとともに、今後の取組について紹介することで、栃木県の切れ目ない家庭教育支援の充実につながる一助にしたい。

学校で保護者対象の学びを企画する方へ！

～「親学習プログラム」をやってみませんか？～

皆さんの学校では、保護者同士が子育てについて学び合う機会は設けられていますか。
「子どもが高校生になって、今さら保護者が学ぶ必要があるのか。」という声もあるかもしれませんが、高校生は、社会に出て独り立ちする準備の期間で、保護者が子育てに関わることができる最終段階の時期でもあります。

親としての学び合いを高校でも

子どもが高校生になると、親はほっとして子育てが終わったような気持ちになることが多いと思います。しかし現実には、終わるどころか、新しい悩みや不安が山積みです。高校生になったのだからと、放任してしまう親もあります。親子でほとんど会話ができなくなることもあります。

世の中はどんどん変化して、子どもたちが世の中で活躍する10年後、20年後には通信手段も職業も働き方も大きく変わっていることでしょう。親世代が自分たちが学んだ知識や技術を子ども世代に教え込むという時代ではなくなりました。親もまた新しい親の役割を学んでいかなければならない時代です。親たちはどのように親の在り方を学んでいけばよいのでしょうか。大切なことは、同じ世代の親同士が、共に学び合うことで最も力になる学習ができるということです。

子どもの将来や生き方などについては、正しい答えが一つだけあるわけではありません。親の在り方も正解が一つではありません。いろいろな親がいるいろいろな子育てをしています。多様な生き方、多様な考え方があることを知ることで、なぜそうしているのかを知ることで、自分も強くなることのできるのです。

親の役割は終わることはありません。学校は、もっと思春期の子を持つ親同士が、学び合える場となって欲しいと思います。保護者や教師、地域の人材が一緒に、自分の学校に合った学びの場を工夫されることを期待します。



宇都宮県立宇都宮高等学校
主任教諭
牧野カズコ

◎学校でこんなことはありませんか？

子どもが高校に入学してから、相談できる相手が近くにいないわー
同じ学校の保護者同士で話せる機会があればー



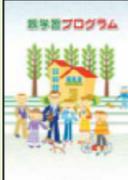
保護者の抱えている不安や悩みを軽くできたらー
学校に集まる機会に何かできればー

「親学習プログラム」を活用すると効果的な話し合いができます！

「親学習プログラム」とは…

- 保護者同士が身近なエピソードやワークを通して話し合いながら子育てに必要な知識やスキルを主体的に学ぶ、参加型の学習プログラムで、栃木県教育委員会が作成したものです。
- 保護者同士の交流が深まったり、保護者と学校の距離が縮まったりするなどの効果があります。
- プログラムは、社会教育主事や研修を受けたボランティアがファシリテーターを務めます。
- 30～120分の展開例がありますが、参加者の状況や人数、クラス単位や学年単位、使用する場や時間、場所等に応じて展開の仕方を自由に工夫できます。

*ファシリテーター：プログラムを進行していく人（促進者）のことで、開放的な雰囲気づくりを心がけ、参加者の主体性を尊重し、特定の方向に意見を導かないよう促します。



親学習プログラム

効果的なプログラムの流れ

- アイスブレイク
- ・参加者の懸念や悩みの雰囲気を取りかします！
- グループ分け
- ・話し合いやすい人数（4～6人）にします！
- ワーク
- ・テーマに沿った話し合いや簡単な投票など内容は様々です！
- 振り返り
- ・気づきや意見等を聞きあとの場とします！

詳細はこちら！⇒ [とちぎ親プロ](#) [検索](#)

栃木県総合教育センター生涯学習部

3-1 研究のまとめ

昨年度、総合教育センター生涯学習部が行った「栃木県における家庭教育支援の状況調査」から、高校生の保護者を対象にした学びの機会が少ないことが明らかになっていた。今回の県立学校を対象にしたアンケート調査からも、保護者を対象にした学びの機会を設けている割合は34%と十分実施できているとは言えない結果が判明した。さらに、「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」の活用がある学校の割合が9%であるという状況についても把握することができた。

今年度は、切れ目ない家庭教育支援の充実を図るため、特に思春期の子を持つ保護者に焦点をあて、「親学習プログラム」の活用促進に向けた研究を進めてきた。子どもを心豊かに安心して育てる教育環境を充実するには、乳幼児期から自立するまでの切れ目ない家庭教育支援が重要であるが、現状ではまだ工夫の余地がある。

また、アンケート調査では、「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」に対する意見等を把握することができた。活用がある学校からの「具体的なアドバイスがある資料等の配付で参加者の満足度や意欲が高まるのではないか」、「特別支援学校の実態を把握している外部人材がいたら情報提供してほしい」といった回答や、活用がない学校からの「プログラムについて理解不足だった」、「本校の実態に合わせて活用したい」、「短時間で実施できるプログラムを知りたい」、「子育てを終えた方の体験談やアドバイスなどあれば保護者は関心を示すかもしれない」といった回答は、新たなプログラム展開案の作成に向けてのヒントにつながった。

本調査研究を進めるにあたり、家庭教育について長年研究を重ねてこられている牧野先生や、ファシリテーターとしての活動経験が豊富な伊吹氏、生井氏、生涯学習課や教育事務所において家庭教育を担当している職員に研究協力員を委嘱した。研究協力委員を構成員とする研究会議においては、県立学校対象のアンケート調査結果等を基に意見交換をしながら、時間配分やグループ分けの仕方、言葉の掛け方、準備する資料の内容など細部にも気を配り、PTA総会や学年保護者会で実施できるプログラムと、講話と組み合わせることができるプログラムの展開案を作成することができた。

研究協力校について、年度途中で依頼することになり実施したのは2校となったが、実施校ではいずれもよい成果を得た。栃木工業高等学校の実践では、活動が進むにつれて参加者の雰囲気や和やかになったことや、自分の子どもが書いてくれた名札シールを嬉しそうに見つめている姿がとても印象的だった。30分という短時間プログラムではあったが、参加者の満足度が高く、ねらいに沿った気付きや学びを得られたとするアンケートの結果から、プログラムが短時間になったとしても、保護者同士が話し合いを通して、悩みを共有したり、意見を交換したりして、子育てについて考える機会の提供につながった。

栃木特別支援学校の実践では、親学習プログラム指導者研修の修了者でもあり、自身が特別支援学校の保護者でもあったという方がファシリテーターを務めた。25分というかなりの短時間プログラムのため、話す時間の確保と安心して話せる雰囲気づくりに気を配って準備等を進めていた。ファシリテーターとしてベテランであり、実際にプログラムを展開する際には、時間配分を熟慮した進行表や仕掛けのある資料を用意するなどして臨んでいたことにより、保護者同士がとても安心した気持ちで意見交換をしたり、満足した表情で帰ったりする姿を見ることができた。こういった参加者の様子や実施後のアンケート結果から、講話内容を振り返るといいうプログラムであっても、参加者の満足度が上がり、話の内容をより理解して気付きや学びを得られる機会の提供につながった。

研究協力校での実践を通して、PTA総会や学年保護者会で実施できるプログラムと、講話と組み合わ

せてできるプログラムの展開案は、保護者の満足が得られ、ねらいに沿った効果も十分見込めるものとして、広く紹介することができる手応えをつかめた。そして、この実践したプログラムなどについてまとめた資料があれば、活用がない学校から出されていた「行事に新たに組み入れる時間的、人的余裕がない」、「短時間プログラムがあるなら知りたい」に十分対応でき、「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」の活用促進にもつながると思われる。

そこで、調査研究の成果として、学校で保護者を対象にした学びの機会を企画する方向けにリーフレットを作成することとした。「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」を紹介するとともに、活用を促進することをねらいとして、調査研究の取組から得られた成果や、実践事例などをまとめた。

「親学習プログラム」を知らない人が目にして理解できることや、実施したいと思ったらすぐ依頼できることなどを考慮して構成や内容を工夫した。また、リーフレットに「親学習プログラム」を継続実施している学校の情報を入れることで、継続可能な要因などを紹介することとした。

3-2 今後に向けて

まずは思春期の家庭教育支援事業に関する調査研究の成果として作成した、「学校で保護者を対象にした学びの機会を企画する方へ！」のリーフレットを有効活用していきたいと考えている。学校等へ配付するだけに留まらず、当センターで実施する研修や会議で配付するとともに説明を入れる時間を加えたり、実際に「親学習プログラム・思春期版家庭教育支援プログラム」を体験してもらったりするなど、教員に直接働きかけることで、認知度を上げ、理解を深め、活用意欲を高めることにつなげたいと考えている。特に、学校行事や教育課程の業務に携わる、20年目教職員や教務主任、教頭研修での実施を計画している。

また、PTAでリーダー的立場にある方が一堂に介する高等学校PTA連合会総会といった機会を、直接働きかけられる貴重な場と捉え、当日配付資料の一つにリーフレットを入れたり、調査研究での実践事例を中心に紹介する時間を設けたりしたいと考えている。

さらに、当センターで実施する研修や会議等で説明をする際は、研究会議において研究協力委員からいただいた貴重な意見や考えをしっかりと押さえ、伝えていきたいと思う。特に、「進学や就職で親元を離れる前に、保護者が子どもに大事なことを語れる最終段階が高校時代であるからこそ、保護者が子どもとの関わり方を学べる親学習プログラムを体験することは重要である。」、「親学習の基本は、他人の話を聞いて、それぞれの考えの違いを知ることであるから、話したり、情報交換したりすることで生き方を学べる親学習プログラムは、絶対に必要なこと。」などは、「親学習プログラム」の必要性を訴えるのに、大変重要かつ有効な言葉である。

今後は、県立学校の教員やPTAでリーダー的立場にある方への直接的な働きかけに重点を置きながら、活用促進に向けて着実に取り組んでいきたい。そして、「子どもが高校生にもなって、親学習プログラムって必要なの？」といった質問が出てきたとしても、この調査研究で得られた成果等を示すことでしっかり対応し、さらには「親学習プログラム」そのものの関心を高め、家庭教育支援の充実に努めて参りたい。